

変奇館の春

男性自身シリーズ

山口 瞳



春の館奇友

男性自身シリーズ

山口 瞳



新潮社



変^{へん}奇^き館^{かん}の春^{はる}

男性自身シリーズ

昭和四十八年九月五日 印刷
昭和四十八年九月十日 発行

定価 五二〇円

著者 山^{やま}口^{ぐち}瞳^{ひとみ}

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(三)二六一二二
振替東京八〇八番

(乱丁・落丁のものは、本社またはお買
上げの書店にてお取替えいたします。)

三

次



私の駄目な

私の麻雀

歯痛

日本人

山草

近頃の職人

遭難(一)

遭難(二)

相撲見物

続・相撲見物

忘れもの

女のひと

中年の女

完

西

元

西

元

西

元

西

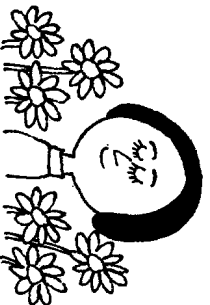
元

西

元

西

元



日本ダービー観戦記

名人就位式

葱 畑

悪い趣味

川端さん

夏の福島

父と子(一)

父と子(二)

博奕考(一)

博奕考(二)

博奕考(三)

博奕考(四)

映画の今日

三四



紀伊長島

庭の景色

生き残り

無念無想流

シガレット・ケース

暗がりのペンチ

夜行列車

上州の蛤

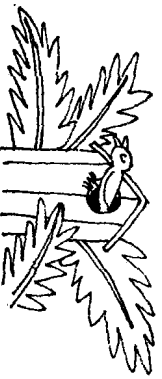
冬来りなば

プロ野球の明日

ヤカロニ・グラタン

万年筆売場にて

去年今年



時計の運命	一〇四
カルカヤ待ち	一一九
林達夫先生	一二四
女の高笑い	一二九
小説家	一三四
新聞社	一三九
名人大山康晴	一三四
酒中日記ふうに	一三九
女中問題	一四四
麥奇館の春	一四九
昔の春ならぬ	一五四
人間の器	一五九
どこへ行く	一六四

カ装
ト幟

柳 原 良 平

変奇館の春
男性自身シリーズ

私の駄目な



私にとって不得手なものはいくらでもあるが、そのなかのひとつが活花である。これは、どうにもならない。やさしそんでいて、実にむずかしい。

活花といったって、水盤に剣山を置いて、といった本式のものではない。そんなものをやる気はない。私のは投げいれである。あるいは一輪挿しである。庭から椿なら椿を取ってきて、壺や徳利や籠にいける。または、花屋からバラなんかを買ってきて花器にいける。これがどうにもならない。まことに不様である。もしそれが正月の花であつたりすると、はじめから、どうしていいかわからない。

実際は、簡単なことなのだ。たとえば、ムラサキシキブを取ってくる。それを瓶にさす。それだけのことだ。それだけのことであるけれど、私がやると、サマにならない。そうかといって、活花の稽古をするという気にはならない。

*

筆と墨でもって文字を書くということも、ずっと苦手だった。講演旅行で地方の都市へ行つて色紙を持ってこられると、うんざりしたものだ。というより、一種の恐怖感におそわれた。

すいぶん前に、北海道に講演旅行に行ったときに、そこは市役所であつたと思うけれど、控室で出番を待ちながら一服やっている、市役所の職員であると思われる若い女性が色紙を持ってきた。その人は、びっくりするくらいに美しかった。そこで私は、色紙に「華麗な花には蜜がすくない」と書いた。それは、たまたま、北海道の蜂飼いの人から、ソバとか菩提樹とか、貪しい花には蜜が多いのだという話を聞いた直後であつたからだ。しかし、その女性が、色白で、ふっくらとしていて、あまりにも美しかったので、なんだか皮肉みたいなことになるといけないと思ひ、よせばいいのに「あなたのことではないですよ。あなたは美しいけれど蜜も多そうだし」と言つてしまつた。すると、その人は、とても厭（いや）そうな顔をして、何も言わずに部屋を出て行つた。私は動（動）願（げん）していたのである。恐怖感（きふかん）は、このことにも由来している。私は、余計なことを言つて、その人を、ひどく傷つけてしまつたのかもしれない。

それから間もない時に「文士の色紙展」といったものが開かれ、主催社（しゅさくしゃ）の人が色紙を持ってきた。私は苦吟（くぎん）のすえに「野に野犬あり」と書いた。そうして、展覧会へ行つてみると、私の色紙は出品されていなかった。私は、がっかりして、重苦しい気分になつた。実を言（い）うと、私は、「野に野犬あり」というのは、そのときは、それほど悪くないと思つていたのである。どうですか、この荒涼たる風景は！

主催社（しゅさくしゃ）の人は、私を見て、次のように懇々（こんこん）と諭（さと）すのだった。

「まず自分の名前だけを練習（れんしゅう）するんです。出来れば書家（しやか）に書いてもらつて、それを真似（まね）て何度（なんど）も何度も練習（れんしゅう）するんです。次に、何か、一字でもいい、愛（あい）なら愛、心（こころ）なら心、それだけをうまく書けるようにする。それです。それが出来れば色紙（しきし）をもとめられても怖（おそ）くありませんよ」

彼の言は至言であつた。そういうものだと思ふ。しかしながら、私は、内心では、そんな人気が
 レントみだいなことは、どうてい出来るわけがないと思つていた。自分の名前を書く、なかなか
 に上手で、形になっている。ところが、それ以外の文字を書く、カラッ下手というときの当人の
 気分を私は理解することが出来ない。

それはさておき、私は、何か色紙用のちょっと気の利いた文句を考へるということにおいても駄
 目な男であることがわかつた。駄目なものは駄目だ。
 ところが、だんだんに、色紙をもとめられても、それほど苦痛にはならないようになった。馴れ
 に図々しさが加わつたのである。

吉野秀雄先生は、書について、次のように語つた。

「四角な字を書くことです。正方形に書くのです。それから、大きな字は大きく、小さい字は小さ
 く書くのです。そうやっていけば、自然にうまくなるよ」

吉野先生の字をよく見ると、いずれも真四角である。

私は、いい道具を使うことを勧めたい。いい筆と、いい墨と、いい紙を使うことだ。そうすると、
 どうしても叮嚀ていねいに書くようになる。それはいいことだ。これほどの世界にも通ずること、将棋を
 指す人は、いい将棋盤を買うと香車一本ぐらい強くなるという。

*

絵も駄目だ。

そう言う、なにやら卑下自慢のように聞えるかもしれないが、私の場合は、一週に一度、デッ
 サンの稽古に通つていて少しも上達しないのである。稽古のある日は、いつでも打ちのめされたよ

うな気分で家に帰ってくる。才能がないのだ。才能がないくせに、お前は何を好きこのんで苦しうとするのか、という声が降ってくる。その声に私は、わからなく、それが俺のいいところだと答える。

俳句も短歌も駄目だ。

私は俳句を読むのは好きなのであり、短歌のほうは、まがりなりにも昭和期を代表する最高の歌人である吉野秀雄の門弟を自称しているのである。それでもって駄目だというのは、よくよく能がないのである。

北杜夫に会うと、必ず斎藤茂吉の歌のことで論争になる。私は、たとえば『赤光』のなかの「世のなかの憂苦も知らぬ女わらはの泣くことはあり涙ながして」といった歌が好きなのであるが、北杜夫は、茂吉の真髄はそんなところにあるのではないと言う。北杜夫は、ご承知のように、茂吉の息子であり、かつ、茂吉の研究家である。私には、鑑賞能力もないのかもしれない。そういうときに、私は、森鷗外だつて短歌は下手だつた、夏目漱石の俳句だつてたいしたことはないと思い、自らを慰めることにしている。(後に北杜夫から「世のなかの」という歌はいい歌だという手紙をもらつた。私の思いちがいを訂正します)

*

書でも絵でも俳句でも短歌でも、それでもって全人格があらわれてしまうようなところが困る。また、そこが面白いところでもある。

書について言えば、うまいからいいというようなものでもない。達者になれば達者になつた目でそむけたくないような字を書く人がある。字がうまくなつたかわりに品格を失つてしまったとい

うことがある。絵だってそうだ。俳句でもそうだ。いつのまにか、大道で売る表札の字になり、ペ
ンキ絵になり、横丁の宗匠になつてしまつて、つまり、感動というところから遠くなつてしまふ。

*

話を活花にもどす。

庭で椿を取ってくる。籠に活ける。それを女房が見て、あらあら、ひどいわねえと言つて、ちょ
つちよつと手をいれる。すると、どうにか見られるようになる。籠のあるあたりに、なんというか、
一種の雰囲気まじりが生ずることになる。

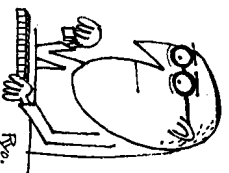
あるとき、私は、庭の秋草でもつて、活花を行なつた。それは、うまくいゝたと思つた。そこへ
弟が遊びにきた。

「この花、だれが活けたの？ これは駄目だめだなあ。……うまく見せようとしているところがいけな
い」

弟は、古くからの草月流の師範である。弟のその言葉も痛かつた。

容易に達せられる芸などはない。あるとき不意にず柿の外に出られるかもしれないという僅わずかかな希
望が残されているだけである。

私の麻雀



麻雀の隆盛は驚くべきものがある。

だいたい、博奕好きの人間にはじまって、やアスプレートした人間、閑人というところから、学生、家庭の主婦におよび、固い会社のおつうのサラリーマンに浸透し、いまや、まさかこの人が思われる、博奕にも無縁であれば結構いそがしくもあり、心情的にととても無理と思われる男たちとの間にも、麻雀が行われるようになった。国技どころか一般教養のなかの必須科目のようになっている。そのことは勤労なくして金銭のやりとりをすることに不感症になっている事態だともいえる。平生から健康状態が思わしくなく会社を休みがちな男が蒼い顔をしているので心配してたずねると、いや、一昨日会社の帰りに雀荘へ行ったらヤチャちゃんの奴が大四喜四暗刻を自摸りましてん、こっちはカッとなって家へ来いって引っ張っていつて、昨日が日曜でっしやろ、それからずっと今朝までやって往生しました、なんて言われると、引っぱたきたくなる。

*

また、麻雀の隆盛に従って、新聞・雑誌・週刊誌が麻雀に頁を割くようになった。このほうも驚くべきものがある、固い固いといわれた週刊誌なんかが競馬欄、麻雀欄を設けるようになる。む